The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語文　第14輯　編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 1955, 14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編輯後記

連歌が、国文学において最も研究史の浅いものの一つに属することには種々の理由が重なつてゐると思ふ。まづ現実には消滅してゐるこの古典形式に対して、積極的な関心のもたれにくかつたことが挙げられようし、更には西欧の文学研究との対照の上で進められることの多かつた近代の国文研究にあつては、対照される種類のなかつた連歌が愈〻研究者の視界から遠ざかつたことも指摘されるであらう。また連歌が単に俳諧の前史として位置づけられ、評価されるにすぎなかつたことが俳諧より一層、その研究意慾をそいでゐることも否めないと思はれる。しかもかうした理由のいづれもが現在なほ生きてをり、連歌に対する単に感じとしての馴染みにくさばかりでなく、他の古典に比べて極めて著しい研究上の障碍となつてゐるのである。

連歌が現代の文学形式として蘇りうるとか、蘇らさねばならないとは私も考へてゐない。さういふ意味で直接現代に生きることは、もはや不可能であらう。しかし日本的特性をいふとすればまづ中世の芸術・芸能が数へられる慣はしにも拘はらず、当時の文化を文学の上で最も優勢かつ鋭敏に代表してゐる連歌ばかりが閑却される理由は、いかにも不審に思はれる。この種の現代的意義・利害はしばらく別としても、せめて中世の精神、感情にとつて連歌とは何であつたかといふことは、それだけで十分考察にたへ、また、解明されねばならない課題であらう。戦後の国文学界の活潑な動きは連歌研究をも順調に促進してゐるやうに見えるが、今私達がこの特集を試みた意図も決して小さいわけではない。

掲載した論考はいづれも特集のために寄稿して頂いたもので、御多忙中、御協力をえた執筆の方々に厚く御礼申上げたい。小西氏の論考は、氏が着々と進められてゐる中国の詩論と日本の文学論との比較研究の一環と申すべきで、従来歌論・連歌論史の中でのみ扱はれてきた良基の連歌論に、的確な照明を加へられたものである。島津氏は湯山三吟を中心に、連歌表現の新しさを和歌との聯関の上で捉へようとされてをり、かうした仕事の積み重なりは恐らく単調な和歌史の記述で塗られてきた中世詩の視野を拡げることゝなるであらう。拙稿はまだ序説であるが、併せて御批判を頂きたいと思ふ。

二月堂のお水取も終りに近づく。本輯が各位の机辺に届く頃はすでに新学期に入つてゐるでせうが、一層の御健勝を祈り申します。

（田　中）

◪投稿規定◪

○直接購読者は投稿することができる。
○原稿の内容は国語・国文学、国語教育に関するものであること。分量は四百字詰原稿用紙二十枚以内とする。
○原稿の送り先は「大阪府豊中市柴原、大阪大学文学部国文学研究室内、語文編輯委員」宛。
○原稿の採否は編輯委員に一任のこと。
○採用しなかった原稿は返送料が添付してあれば返送に応ずる。
○一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。

❖雑誌の寄贈・交換について

○雑誌の寄贈・交換は大阪府豊中市柴原大阪大学文学部国文学研究室宛に願いたい。

❖購読について

○購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。（送金は振替を利用されたい。）

一部　五十円　送料　八円
一年分（四回分）二百円（送料共）

○五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

¥ 50

発行所　大阪市南区横堀7丁目19　文進堂　振替大阪112730番　電話船場1990番
編輯者　大阪府豊中市柴原　大阪大学文学部国文学研究室　代表　小島吉雄